

## ■ 卷頭言 ■

### 未踏科学技術の警鐘

東京大学・名古屋大学名誉教授  
（株）アルバック技術顧問  
内田 岱二郎



文明史を繙くといかに古代の人達が未開の地で開拓の歴史を積上げていったかを知る。しかしそのいずれもがここ1~2万年の間の出来事であることを思うと、そこに古代人への郷愁と共に、僅かここ10~20世紀の事の近さに驚く。

伝える処に依れば人類は、この地球が静穏で温暖であったその間に（地球学者は間氷期と云う）暦を発見し時を覚え、食生活の安定化、計画化を実現して急速に発達した生物の由である。

そして又人間は、他生物と比べて成長期、成熟期に続いて極めて長い後生殖期（80年の人生なら後半の30年）を持ち、他生物に見られない様々な特性や才能を発揮して来た。科学技術の発見発明等は最たるものでそれ迄の物質圏、生物圏と別に新たに人類圏を確立し、急激な人口増加と同時に環境汚染を招いてきた。

しかしながら人間は、自ら持つ負の属性すなわち残虐性、権威欲、報復心等を制御できず、ために常に民族や国の中の争い、宗教や主義の間の相克から殺戮迄を繰り返して今日に至っている。

その過程は明らかに時間という一本軸の上に重なった非可逆な歴史そのもので、途中様々な原因と結果が折り重なって一様でないが、その間にいくつかの共通な同一現象を見ることが出来る。

その1つは地域的背景、地代的格差の違いにも不拘、拾年、百年、果ては千年に亙る文明の興亡の歴史の中に共通する栄枯盛衰の実態であり、その様相はポストモンゴル迄の長い大陸文明の後に続いた近代海洋文明においても繰返され、一世紀前なら大英帝国の衰亡があり、90年代ならわが日本の低迷がある。私達はこれ等衰亡の歴史に潜む

ところの本質や生き様の実態を学ぶことが先ずは焦眉の急ではないか。

2つ目には、互いの間の違いに対する理解の無さを掲げる。同じ人間であり乍らその生れた場所や時代の違いで価値観は異なり、果ては理念や信条や目的迄違うのでその差を弁えず自分達の文化や思想を押しつけると紛争の元となり、落ち着く迄拾年から数十年以上はかかる。イスラム教のイラクと自由・民主主義の米国の間はどう解決するであろうか。

翻ってわが日本はその地勢的・地政学的特質から長期に亙って文治国家を誇った反面、国際的には他流試合の経験乏しく、大政奉還と廃藩置県という明治維新の潔さが逆に、戦後に見せた文化国家としての特質を自ら放棄したような人の良さは、バブル期の国民的高揚と併せてその幼さから一日も早く脱する必要がある。

時代は力はあるがその思考形態は単純さから脱し切れない米国が主導のグローバリゼーションを超えて既に進み出しており、新技術や新商品も新しい便利さや新しい楽しさに合せてハード・ソフト混然一体となって出回り始めている。

要諦は、多様な違いの中に積極的に身を投じて違いの中に潜む新しい智慧や知識を開発し、それを新生のエネルギーとしてサバイバルの道を歩むべきであり、それこそ今後日本の進む道と思う。

難しいのは私達が未来に資する本務を屢々忘れ、現代文明が持つ便利さや楽しさを先導する余り、人間が本来持つ機能を損ない、仮視的な幸福に自らを随しめる可能性はないか。その警鐘こそ未踏科学技術が果たす役割かと思われる。